

## SMGLレポート2911

有事のルール[地方にも広がる域内格差 立地/業界/情報/人材…][迫り来る法改正と時代変化の荒波-45]

●生活圏における景況感<sup>は</sup>、政府が喧伝しマスコミが相乗りする「いざなぎ景気越え」等とは程遠い状況にあるように思われます。大手企業の本社や官公庁の中核機能が集中し、昼間人口が膨張する都心部＝千代田・中央・港＋品川＝を除き、ベッドタウンはもとより周辺都区部での、**外食業界の低迷**が特に目立ち始めて来ています。長期にわたるデフレ下で、低価格競争が行く処まで行き着き、限界点に達する中、円安(原材料費の上昇圧力)と、人口減少(人件費の上昇圧力)の挟み撃ち＝外食業界では、この二つをFOODコストとLABORコストの頭文字をとり、併せて**FLコスト**と呼ぶのが一般的。これに店舗の賃貸料(RENTAL費用)を加え、**FLRコスト**と表現する事もある＝に遭い、迷いに迷った挙句、已む無く値上げに踏み切った処、今度はその価格改定で客足が急速に鈍る、という出口の見えない袋小路に追い込まれているのが実情です。そればかりではありません。客集めの為、採算割れ覚悟で始めた**ランチタイムサービス**が仇となり、客はランチには群がるものの、稼ぎ時のディナータイムには店は閑散、**ランチ集中による食材不足**や**ディナー客の減少による生鮮材の廃棄**もしばしば発生する等、一向に可処分所得の増えない家計と消費者心理に振り回され、売上を上げようともがけばもがく程、赤字も増えるという、悪循環過程に嵌まり込む原因を自ら作ってしまっているのです。●中でも一人当たりの客単価が高く、ただでさえ敬遠され気味の**昔ながらの寿司屋**は、**宅配に割ける人手も限られ、出前を抑えようとする**と更に**注文自体が減る、という苦境**に立たされています。住み慣れた町から、寿司屋が一軒また一軒と姿を消し、せめてその代用にと已む無く出向いたスーパーの総菜コーナーも、いつの間にか店ごと消え失せ…等という近未来図も決して絵空事ではなく、極めて現実味を帯びた話になりつつあります。東京23区内でさえ、この有様…ましてや、**既に先細りの先行例**となって**久しい地方の実情**は、東京の比ではありません。各地で中小事業者のサポートに携わっている専門家の話から、そのホットな実態をお伝えしようと思います。●まずは東北地方ー。賑わいを見せているのは仙台のみ。後は震災復興予算の注入先となっている建設業者に一旦流れたマネーが歓楽街で使われ、それで潤っている小名浜(福島県・浜通り)程度。この外の地では盛り上がりは見られず、軒並み停滞・低迷状態との事。次に、2015年に事実上開業した北陸新幹線により、何らかの影響が及んでいる北陸地方の現況ですが、中核都市「**金沢**」については、**依然としてブームが去った様子は見られず景況感も悪くない**という事でした。金沢は仙台同様、拠点ターミナルである一方、歴史的・文化的遺産にも恵まれ、元来、他の諸都市とは同列には論じられない優位性を有しており、この結論は至極順当な処かと思いますが、その他の諸都市には特段の効果は及んでおらず、**ショッピングセンターも撤退テナントが増えている**様でした。又、中国地方の中核拠点となる**広島**ですが、此処は**マツダとカープの成績次第**で景況が変化する土地柄で、その意味では、ソフトバンクのお膝元「福岡」にも通ずる話の様です。●では、身近な処で東京近郊はどうなっているかと云いますと。インバウンドやオリ・パラ効果で、2020年までは右肩上がりの景況が見込まれるものの、その先の見通しは描けていないとの事。因みに、復活が期待され、その噂もあった**熱海**では**源泉の枯渇化が進んでいる、という話**も伝わってきています。●この様に、地方と云っても大都市近辺と遠隔の地域、観光資源の有無や良否等により、**これまで以上に域内格差＝まだら模様＝が広がりつつある**様で、画一的な経済政策では太刀打ちできない事態となっているーというべきかも知れません。